

## Topics

- 2月18日に栗山上席研究員が建築設備総合ゼミナール(主催 建築設備総合協会)にて、「ゼロカーボン建築は可能か」というテーマで講演いたします。
- 2月18日に開催する第26回NSRI都市・環境フォーラムは、浜野安宏氏(ライフスタイル・プロデューサー)によるご講演「生活地へ-幸せのまちづくり-」です。詳細は<http://www.1k.mesh.ne.jp/toshikei/>まで。
- 1月25日に松村主任研究員が、ベトナム・フエ省で省及び建設省が主催する国際会議にて、Realization of “Progressive Tradition” Through Spatial Development というテーマにて発表を行いました。

## 文化のバリューを考える

### 1. 文化戦略の時代へ

コンクリートから人へ(©鳩山政権)。国際機関においては、2004年にUCLG(都市・自治体連合)が「文化のためのアジェンダ21」を定め、2005年にユネスコが「文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約(文化多様性条約)」を採択するなど、文化政策の国際ネットワークが生成されている。国内では文化庁による「文化芸術創造都市」の支援をはじめ、国交省でも都市文化政策による地域活性化について調査が進められるなど、「文化」への公的関与(支援)による都市・観光・産業戦略が種々に語られている。

### 2. 拡大する文化の定義

作品(硬いもの)から振るまい(柔らかいもの)へ。文化政策における文化の定義は、「様々な創造物や遺産」から、「人々の振るまいや特定の生活像」へと、拡大傾向にある。

例えば「柏の葉」における一連のアートプロジェクトを見てみよう\*1。ジャン・リュック・ヴィルムート(フランス人アーティスト)が仕掛けた市民がハチを世話する「はちみつプロジェクト」、エドアルド・マラジジ(イタリア在住アーティスト)が提唱する子どもの社会・職業体験イベント「ピノキオプロジェクト」、井上信太(アーティスト)らが公共空間の風景を一変させたピクニックイベント「ピクニックエキスポ」、アーティストのパフォーマンスあふれる参加型市場「マルシェコロール」、市民向け創作ワークショップ「五感の学校」、体操文化を育てる「はっぴっぴ体操」など、様々な取組みがまちづくりの一環として企画運営されている。これらのプロジェクトは、国や自治体から助成や賞を受けるなど公的措置もなされている。

### 3. 文化の価値を巡る難問

このように多様で個別的な文化実践(例えばアートプロジェクト)を、文化政策の観点から「目的と手段」の体系に整理することは可能であろうか。さらには、<文化>実践の<文化そのものの>価値とは何であろうか。

フランスの社会理論家ド・セルトールは、文化の戦術とは「測定可能な与件にたいして測定不可能な危険を賭けることである」\*2としている。地域でのアートプロジェクトなど種々の文化実践においては、「安定性を捨てること」「試行錯誤すること」が概ね志向されている。何が起こるか分からない、曖昧で複雑なミッションと非構築的な制作プロセス(の構築)が意図されている。文化のバリューを考える上での困難さがここにある。

為政者サイドからしたら、「地域の主体的(内発的)参加」「ソーシャル・キャピタル」「交流人口の拡大」といった枠組みで単純化できれば説明がしやすい。しかし、個別の実践(施策)に着目してアプローチするならば、前提となる文化の定義は混沌とし、効果を測るデータは足りず、施策のミッションはあやふやとなりがちである。政策と実践をつなぐパイリンガルとなるためには、文化実践の様態に即した分析が必要と思われる。

### 4. 指標のフレームワーク

文化実践の価値とは何か。ここでは、まちづくりに資する価値指標の一端を例示したい。慣習の獲得(文化実践を契機とした異者との接触により従来の慣習が変容すること)、連環性(生活のみならず、景観・観光・環境配慮・地域産業など、多分野に連環した影響があること)、公共空間の生成(多様な参加を歓迎し包摂する場所が生成され文化生産を担うこと)、潜在性(隠れていた地域の能力が発掘・記述されること)。



文化生産を担う場所づくりのイメージ

文化の価値とは複雑である。文化政策の「目的と手段」の研究は、端緒に着いたばかりである。(藤田 朗)

\*1 小山田裕彦氏らにより計画、実施されている。

\*2 ミシェル・ド・セルトール著、山田登世子訳「文化の政治学」

### 定期配信をご希望の方

定期配信を御希望の方は、下記メールアドレスまで。  
(chihiro.kimura@nikken.co.jp 担当: 木村千博)

### 編集後記

先日、東京にも雪が積もり寒い毎日が続いていますが、梅祭りの話題も聞こえてくるようになりました。毎年桜の季節になると、梅は?と思ひ出すので、今年こそは梅祭りに行こうと思います。(Y)